

2010年11月18日

演習タイトル：ナミブ砂漠クイセブ川沿いの自然観察と調査方法に関する実習

講師：水野一晴

キーワード：植生、地層、環境変遷

要約

ナミブ砂漠クイセブ川沿いの自然観察と実習を通して、この地域の環境変遷のようすを推測する調査方法について学んだ。

植生からわかることの例としては、*Faidherbia albida* があげられる。この植物はクイセブ川河床に多く見られたのだが、土地が低く、水分がある所に分布する。現在河床に多く見られたことから、かつて大きな洪水が起こった時に大量に発生し、その後大きな洪水が起こっていないため、流されずにそのまま成長している、と考えられる。この地で見られた他の植物の例としては *Salvadora Persica* があげられる。この植物はブッシュをつくり、根を広げるようにして成長し、砂をかかえこむため、砂丘が大きくなる要因を作っている。また、河床側には *Faidherbia albida* が多く見られ、その奥に *Acacia erioloba* が多く見られた。これは、*Acacia erioloba* の方が、気候条件がより厳しい所に生える傾向があるためである。また、倒木から発芽している樹木も多く見られた。厳しい環境を生き抜くためであると考えられる。

さらに、植物の根に沿って穴を掘り、植物の根の形状と地層を観察する実習を行った。地上付近はシルトと砂から成る層で、その下部には砂だけの層が広がり、より深い部分にシルト層が見られた。シルトは河川が運んでくるものなので、シルト層があることから、その頃に洪水が起こっていることがわかる。また、植物の側根は水分を含むシルト層の部分に張られていることも観察できた。

植生と地層、見て観察できることからわかる情報がいかに沢山あるか、ということを実感した。フィールドワークというと、まず人に話を聞いて…、と思いがちだが、見てわかる情報の大切さを再確認できたと思う。

(報告者：有井 晴香)